●戦前の政治史上、最も重大な意味を持つ五・一五事件
▽昭和7年5月15日夕
　海軍青年将校 陸軍士官候補生の一団が
　　永田町の首相官邸を 襲撃した
▽77歳の老首相 犬養毅は
　「話せばわかる」と 一同を制したが
　「問答無用、撃て！」の一声と共に 射殺された
▽「話せばわかる」は
　長年 政党政治 議会政治に
　命を懸けてきた犬養の 真骨頂の言葉
　　返ってきた「問答無用」は 言論の完全な否定
▽戦前の政党政治は 事実上 終止符を打ち
　政党の党首が 首相になることは
　　敗戦まで13年間 二度となかった

日本の政党政治

明治18年12月内閣制度が創設され、初代首相に伊藤博文が就任以来、31年6月まで、6代薩長の藩閥内閣が続いた。この間、23年7月第1回総選挙、同年11月帝国議会が開設されたが、31年6月憲政党党首大隈重信が首相に就任。初の政党内閣となったが憲政党分裂で4ヵ月で崩壊。大正7年議会第1党の政友会総裁原敬が首相となるも、総選挙で勝利した政党の党首が首相となるのは、13年6月、第2次護憲運動により憲政会加藤高明内閣の成立が初めてだった。

本格的な政党内閣時代を迎えるのに第1回総選挙以来34年もかかったが、憲政会第1次若槻礼次郎内閣（15年1月）、政友会田中義一内閣（昭和2年4月）、民政党浜口雄幸内閣（4年7月）、民政党第2次若槻内閣（6年4月）、政友会犬養内閣（6年12月）と6代、わずか8年間で幕を閉じた。

▽政治の主役は 軍部に代わり
　軍部の鼻息を うかがわなければ
　　何も出来ない日本に なっていった

●犬養内閣成立は満州事変勃発3ヵ月後の昭和6年12月
▽なぜ 首相就任半年で 暗殺されたのか

夢声の「問答有用」（週刊朝日）

徳川夢声の人気対談シリーズ。時の人、話題の人から、軽妙洒脱に面白い話を引き出したが、戦争が終わり、何でも自由にものが言えるようになった、どんどん話し合おう、新しい時代の到来を、私たちに呼びかけた。

徳川　夢声（とくがわ・むせい）
明治27（1894）～昭和46（1971）島根県生まれ。本名福原駿雄。映画弁士として売り出し昭和14年NHKで「宮本武蔵」を朗読、話術の第一人者に。戦後「話の泉」（ラジオ）などで活躍。著に「夢声戦争日記」

犬養　毅（いぬかい・つよし）
安政2（1855）～昭和7（1932）岡山県生まれ。号は木堂。明治15年大隈の立憲改進党結成に参加、第1回総選挙以来連続当選18回。文相を経て国民党総理、革新倶楽部代表。護憲、普選運動を推進、「憲政の神様」と称される。この間中国革命派孫文らを援助。大正13年加藤内閣逓相。14年普選法成立を機に、政友・革新の合同を図り、政界引退を表明するも、昭和4年政友会総裁。6年12月首相に就任

加藤　高明（かとう・たかあき）
万延1（1860）～大正15（1926）愛知県生まれ。外相を歴任、大正5年憲政会総裁。13年護憲3派連合を結成し首相。普選法・治安維持法を制定。在任中に病死

古島　一雄（こじま・かずお）
慶応1（1865）～昭和27（1952）兵庫県生まれ。政治記者として活躍。明治44年衆院議員（当選6回）、犬養の懐刀に。戦後21年鳩山一郎の公職追放で自由党総裁に推されたが辞退、吉田茂首相の後見役に

犬養の盟友古島一雄は断言する

「陸軍や関東軍が進めてきた傀儡国家満州国の建国に、犬養が断固反対したからだ。犬養はそのために殺されたのだ」

●陸軍は、最初は犬養内閣を歓迎していた

▽第2次若槻礼次郎内閣(民政党)は
「満州事変不拡大」の方針
外相も 平和外交・国際協調主義の幣原喜重郎

▽犬養内閣は 内閣書記官長に森恪
陸相に荒木貞夫と 対中国強硬論者

▽森は「森内閣だ」と言われたくらい やり手
「満州問題はどんな犠牲を払っても、
この際解決してしまわなければならない」

▽荒木も「満州事変はあのままでは、
仏作って魂入れずだ」満州国建国をぶっていた

▽陸軍は この二人さえいれば
犬養内閣は 思うままに 動かせると思っていた

●犬養は、陸軍が喜ぶほど協力的ではなかった

▽元老西園寺公望は 憲政常道論から
若槻内閣が行き詰まった以上 犬養を首相に

▽昭和天皇は 西園寺に 異例とも言える注文

昭和6年歌会始の御製(御題は「社頭雪」)

ふる雪に こころ清めて
安らけき 世をこそ祈れ 神のひろまへ

▽陸軍は 満州事変で「不拡大方針」を破り
国際関係への悪影響を 夜も眠れぬほど心配

天皇の意思は国際協調・軍部の統制確保

西園寺に「今日のような軍部の不統制並びに横暴 ― 要するに、軍部が国政、外交に立ち入って、かくの如きまでに押しを通すことは、国家のために憂慮すべき事態だ。この自分の心配を心して、お前から犬養に充分に含ましておいてくれ。その上で自分は犬養を呼ぼう」

▽天皇は 参内した犬養に
「犬養頼む。軍を抑えてくれ。頼む」

「大正政変」を動かした古島

陸軍は2個師団増設を要求して大正元年12月、西園寺公望内閣(政友会)に拒否され、陸相の辞職で内閣を倒した。第1次護憲運動が起こり、「憲政擁護・閥族打破」の声が全国にこだまし、代わった長州閥桂太郎内閣は50日余りで崩壊。民衆の力が内閣を倒した最初で、このスローガンも古島の考案。

若槻 礼次郎(わかつき・れいじろう)
慶応2(1866)～昭和24(1949) 島根県生まれ。蔵相、内相を歴任。大正15年首相。昭和2年の金融恐慌で辞職。ロンドン会議首席全権。6年4月、再び首相に就任したが満州事変勃発で8ヵ月で辞職。戦争末期、重臣として和平に尽力した

幣原 喜重郎(しではら・きじゅうろう)
明治5(1872)～昭和26(1951) 大阪生まれ。大正13年以来、加藤・若槻・浜口内閣外相。国際協調、平和外交を展開。戦後、昭和20年10月首相。24年衆院議長

森 恪(もり・つとむ=通称かく)
明治15(1882)～昭和7(1932) 大阪生まれ。明治34年三井物に産見習生で入社、20年近い中国生活で多くの合弁事業を手がけた。大正9年政友会から衆院議員(当選5回)。昭和2年田中内閣外務政務次官となり山東出兵など強硬外交を推進。4年政友会幹事長、6年犬養内閣書記官長

荒木 貞夫(あらき・さだお)
明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。陸大校長、第6師団長など歴任。精神主義的・反共主義的言動で皇道派の中心的存在に。昭和6年犬養内閣陸相となり、陸軍中枢を自派で固めた。二・二六事件で予備役。13年近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年仮出所

▽犬養が「身命を賭して」と 答えたのは
30歳の若き天皇の思いに 満州事変を平和解決
陸軍を抑えて行こうと 心に誓ったのだ

●内閣中枢に森、荒木を抱え、前途は多難だった

尾崎行雄の言葉

「犬養は政友会総裁といい乍ら、事実は、政友会といふ屋敷の借家人だ。借家人が借家を頭に被って総理大臣になったのでは、到底、自己の志を行ふことも出来まい」

▽長年 国民党 革新倶楽部と 少数政党を率い
一旦は 政界引退を表明 隠居同然の身
74歳の高齢で政友会総裁 党内基盤は弱かった

●普通選挙法に政治生命を懸けて来た犬養

▽安政2年 2万石の庭瀬藩(岡山県)で
苗字帯刀を許され 庄屋を務める 郷士の家に

毅は、漢学好きの父が孔子の言葉から

「士は以て弘毅ならざるべからず」この言葉は「任、重くして、道、遠し」と続く。犬養が大正10年4月22日、満66歳の誕生日に新宿御苑の観桜会に出席している時、長男健に女子誕生。普選法も年々高まりを見せており、「重い任務の道半ばを過ぎた時に初孫が生まれた」この感慨をこめて「道子」と命名した。

▽14歳の時 父親がコレラで病死 生活は激変した
6歳から習っていた 漢学を生かし
寺子屋を開いたが 飢えと貧苦の どん底だった

物を大切にし、粘り強さ、不屈の精神は

少年時代の辛い体験が育てたものだった。自分の所に来た葉書の余白を丹念に切り取り、メモ代わりとか、本の索引に使った。

道子に、「恕」の1字を教訓として与えている。「自分は貧窮困苦のうちに成長し、世の辛酸と人の心の移り変わりを知って、人となった。だから、他人に対しても、あの頃の自分の境遇にあったならばと、思いやらずにいられない。使用人を叱ったり、罵ったりしないのは、そのた

西園寺 公望(さいおんじ・きんもち)

嘉永2(1849)～昭和15(1940) 京都生まれ。九清華家の出。文相、枢密院議長。明治36年政友会総裁。39年首相。44年再度首相の時、2個師団増設要求を拒否し陸相辞職で総辞職。パリ講和会議全権。最後の元老として後継首相奏請に当たる

尾崎 行雄(おざき・ゆきお)

安政5(1858)～昭和29(1954) 神奈川県生まれ。号は咢堂。第1回総選挙以来、連続当選25回。文相、東京市長を歴任。「大正政変」で護憲運動の先頭に立ち「憲政の神様」と称される。昭和27年代議士生活63年で国会から「名誉議員」の称号を受ける。没後「尾崎記念館」設立

普通選挙法

身分、教養、財産の制限を設けず、一定の年齢に達した成人なら誰でも選挙権、被選挙権を有する制度。明治25年から運動が始まり、大正14年3月普選法が衆院で可決。普通選挙は昭和3年2月に男子について実現、女子は戦後初の21年4月の総選挙で実現した。

犬養 健(いぬかい・たける)

明治29(1896)～昭和35(1960)東京生まれ。毅の長男。白樺派の作家として活躍したが、昭和5年政友会から衆院議員。7年犬養首相秘書官。戦後吉田内閣法相。29年造船疑獄で指揮権を発動し佐藤栄作幹事長の逮捕許諾請求を阻止。「職権乱用」の世論の非難を浴び、法相辞任

犬養 道子(いぬかい・みちこ)

大正10(1921)～東京生まれ。健の長女。昭和23年留学、パリ大などで学び、32年帰国。翌年「お嬢さん放浪記」を発表。45年以降はヨーロッパに在住。著に「花々と星々と」「ある歴史の娘」

めだ。どんな時でも思いやりを持つ人になれ、恕す心を忘れるな」

●明治8年、20歳の時に福沢諭吉の慶応義塾に
▽1課目の授業料がやっと 英語の読みだけ習う

日本の従軍記者のはしり

明治10年の西南戦争で郵便報知新聞から「どうだ、戦記報道をやらないか。危険だが帰ってからの学費は毎月10円出す」「戦地探偵人」という奇妙な肩書きを貰い、勇躍熊本へ。犬養のルポは「戦地直報」のタイトルで百数回掲載されたが、大変な評判だったという。死後皇室から賜った誄詞（るいし=生前の功績を讃えた言葉）には「文章身ヲ起シ言義志ヲ行フ」とあった。

犬養が戦場で歌った漢詩「鉄馬いななかず人語らず」が、連隊長乃木希典の目に留まり激賞されたという。乃木は日露戦争・旅順攻略戦で「山川草木転た荒涼 十里風腥し新戦場 征馬すすまず人語らず 錦州城外斜陽に立つ」の有名な漢詩を残している。心のどこかに、青年犬養の詩から受けた感銘が残っていたのでは。

▽谷干城（熊本鎮台司令長官）に「軍人になりたい」と志願
「戦争は長くは続かない。それよりは学業を続けなさい」慶応義塾に戻った犬養を 福沢は「この命知らずの大馬鹿者」と 叱りつけた
▽慶応では 福沢主宰で 演説会がよく開かれた
尾崎と共に 弁舌で鳴らし「慶応の双竜」
▽明治14年 大隈重信（参議）から
「若い人材を起用したい」福沢の推薦で役人に
▽15年 大隈の立憲改進党に参加
大隈の参謀として活躍する 政治生活の始まり

号は「木堂」

栗本鋤雲（郵便報知主筆）が、「木強ければ共す」（老子）「剛毅木訥は仁に近し」（孔子）から。情義に厚い人だったが、口は相当悪かったようで「犬養は演説で人を引き付け、演説で人を失う」と言われた。尾崎とは、雄弁な点でも貧乏な点でもそっくりだったが、馬場恒吾（政治評論家）は二人の違

福沢 諭吉（ふくざわ・ゆきち）
天保5（1834）～明治34（1901） 豊前中津藩出身。慶応義塾創立者。幕府使節に随行し3度欧米に渡る。明治15年時事新報創刊。著に「西洋事情」「学問のすゝめ」

乃木 希典（のぎ・まれすけ）
嘉永2（1849）～大正1（1912）長州支藩の長府藩出身。陸軍大将。西南戦争で連隊長。台湾総督、第11師団長を経て日露戦争で第3軍司令官として旅順攻略。明治40年学習院長となり昭和天皇の教育に当たる。明治天皇崩御で夫人と殉死

谷 干城（たに・たてき）
天保8（1837）～明治44（1911） 土佐藩出身。陸軍中将。西南戦争で熊本鎮台司令長官。学習院長、農商務相などを歴任

大隈 重信（おおくま・しげのぶ）
天保9（1838）～大正11（1922） 肥前佐賀藩出身。明治3年参議となるが14年の政変で免官。翌年立憲改進党総理。東京専門学校（現早大）創立。22年黒田内閣外相として条約改正交渉中、爆弾を投げられ、右足を失う。31年憲政党を結成、史上初の政党内閣を組織したが閣内不統一で4ヵ月で辞職。大正3年再び首相となり、対独宣戦布告、対支21ヵ条要求を行う

栗本 鋤雲（くりもと・じょうん）
文政5（1822）～明治30（1897） 江戸生まれの幕臣。外国奉行の慶応3年渡仏し日仏親善を図るが幕府が倒れ、明治5年から横浜毎日、郵便報知で健筆を揮った

馬場 恒吾（ばば・つねご）
明治8（1875）～昭和31（1956） 岡山県生まれ。国民新聞政治部長、編集局長を経て政治評論家として活躍。昭和20年、読売新聞社長。24年日本新聞協会会長

いを、こう書いている。
ある時、青森から山林払い下げの陳情団が来た。尾崎は30分もかけてじっくり聞いてやる。犬養は、顔を見るなり「そんなことは運動したってダメだ。日当の損になるから、帰れ帰れ」。
後で新聞記者が、尾崎にどんな話だったのか尋ねると「ハア、何か言っていましたな」陳情団の話は上の空、演説の腹案でも考えていた。「結論の分かっている事に、無駄なことはさせない犬養の親切は、人には通じなかった」

●終生、清貧に甘んじ、金を作れる政治家ではなかった
▽政治資金は 高利貸しから 借金をした
▽見兼ねた古島が 大隈から借りて
高利貸しに返すと 犬養は 烈火の如く怒った
「公の事で大隈と結んで、私の事で大隈の援助を受けたら、生涯大隈の奴隷になる」
▽大隈に突き返した金も 高利貸しからの借金
▽執達吏が しょっちゅう 差し押えに
お嬢さん(芳沢謙吉外相夫人)が ままごと遊びで
その真似をして そこら中に ベタベタ紙を貼る
▽さすがの犬養も 参って
古島が実印を管理 余計な金を 借りないように

●大正14年5月、政界引退を表明したが…
▽念願の普選法が成立(3月2日) 大任を果たした
▽革新倶楽部(議員30人)を
対立関係にあった政友会に 合同させると
党首としての節を通し 逓信相を辞職した
▽「純粋の浪人として青年たちの相談相手になり、普通選挙の水先案内人にでもなれば…」(引退の弁)
▽古島も 犬養に殉じて 代議士を辞職
「金力か権力がなければ、政治の世界に生きていけない今日、犬養に最後の一人になるまで戦えとは、とても強要できない」
▽地元岡山の「ボクきち」(木堂気違いのこと)が
放っては おかなかった
初の普通選挙(昭和3年2月20日)に 勝手に立候補届出
▽政友会も最高顧問に 抱えているだけで 党の看板

借金について犬養

高利貸しから借りるのは、いい事とはいえんが、別に恥ずへき事ではない。士として慎むべきは、権力者はもとより、自分より目上の者から借りることだ。一度そうすると、義理が出来て、肝心の時に進退に困る。高利貸しなら、向こうから頭を下げて持ってくるのだから、その心配はない。

芳沢　謙吉(よしざわ・けんきち)
明治7(1874)～昭和40(1965) 新潟県生まれ。犬養の女婿。中国公使、駐仏大使、国際連盟代表を歴任。昭和7年犬養内閣外相。16年仏印大使。国民政府要人との交友が深く、戦後27年に台湾大使

子供や孫は学習院に

生涯ほとんど野党逆境に徹し、履歴書に「士族」と書くのさえ嫌がり常に「平民」と大書してきた犬養が、子供、孫はみんな学習院に入れている。
「犬養の子が普通の学校に行けば、『犬養、犬養』と、何かにつけてちやほやされるかも知れない。それが学習院なら、上は皇室から五摂家、元老など、有名人ばかり。平民野党の犬養などは、ビリのビリになる。有名であることの虚しさも身にしみて味わえるし、名門貴族に混じって物怖じしなくなる。犬養の家は世々代々、野党であって欲しいから、そのためには、正反対の貴族、華族のど真ん中に子供を放っぽり出す」
仲子(道子の母)が「学習院じゃ勉強があんまりねえ」とためらうと、「バッカ、勉強は学校でするもんじゃない、自分でするもんだ。学校がよくなきゃ、学問をせんような奴は、どだい、屑にしかならん」

●思いもかけず、政友会総裁の椅子

▽田中義一総裁が 急死(昭和4年9月29日)

有力候補は4人 誰がなっても 党分裂の恐れ

幹事長森恪は「犬養総裁」に動いた

森は鳩山一郎と組んで鈴木喜三郎(鳩山の義兄)を推すと見られていた。ところが、田中葬儀の席で古島に犬養総裁案を持ち出した。「鈴木を総裁にしようと思えば、する自信はある。しかしそれでは反対派が脱党する。政友会分裂は、何としても避けたい。犬養なら人物、経歴から文句はあるまい。また高齢だから、その後は自分がという気になって、党内の納まりもつく」

森は、鈴木を「犬養は暫定総裁だ」と口説き落とすと、党の大長老高橋是清を訪ねた。高橋も「犬養なら党も纏まる」と大賛成。

▽犬養は 総裁受諾に 条件を付けた

「犬養は金を拵えぬ。

その代わり、政策は党幹部の自由に任す」

▽森は 最初から「名目上の党首」

犬養で 党のイメージアップ 実権は自分たちで

統帥権干犯問題

昭和5年4月、浜口雄幸内閣(民政党)は、軍令部の反対を押し切り、ロンドン海軍軍縮条約(巡洋艦など対米69.75%)に調印した。政友会は倒閣のため、犬養総裁が先頭に立ち「統帥権干犯だ」と攻撃したが、軍備の問題を内閣から締め出す、政党内閣の首を絞めるようなもの。犬養が、日ごろの政治信条からかけ離れた主張をしたのも、「政策は党幹部に任せる」約束からか?

犬養は、総裁受諾に「年寄の冷や水」

道子は「そうではない。軍部を抑えるため、最後のご奉公の積もりで引き受けたのだ」狂気の沙汰の陸軍を抑えるには、「多数党の党首になって、天下を取る以外に道はなかった」

白樺派の作家で、「政界なんかに入らないよ」と言っていた長男健が、「お父さんには腹心がいる。後継ぎがいる。議会政治を生かし続ける後続がいる」と、政界入りを決意したという。

田中 義一(たなか・ぎいち)

元治1(1864)～昭和4(1929)長州萩生まれ。陸軍大将。参謀次長、陸相を歴任。大正14年政友会総裁となり、昭和2年首相就任。3次にわたる山東省出兵を強行した。張作霖爆殺事件の処理で、天皇から叱責され総辞職。3ヵ月後に急死した

鳩山 一郎(はとやま・いちろう)

明治16(1883)～昭和34(1959)東京生まれ。大正4年政友会衆院議員(当選15回)。昭和2年内閣書記官長。6年犬養内閣文相。戦後、自由党を結成、初代総裁となったが、21年5月、組閣直前に公職追放され、吉田茂に総裁を譲った。29年、日本民主党を結成し総裁。同年12月首相。31年自由党総裁となり、日ソ国交回復を実現

鈴木 喜三郎(すずき・きさぶろう)

慶応3(1867)～昭和15(1940) 神奈川県生まれ。司法次官、検事総長を歴任し大正13年清浦内閣法相。昭和2年田中内閣内相となり、特高警察拡充、治安体制強化を推進した。犬養内閣内相兼法相。犬養暗殺後、政友会総裁に選ばれた

高橋 是清(たかはし・これきよ)

安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、戦費調達の外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し、大正10年原敬首相暗殺で首相、政友会総裁。昭和2年田中内閣蔵相となり金融恐慌を収拾。満州事変後も犬養・斎藤・岡田内閣蔵相。二・二六事件で暗殺

浜口 雄幸(はまぐち・おさち)

明治3(1870)～昭和6(1931)高知県生まれ。蔵相、内相歴任。昭和2年民政党結成と共に初代総裁。4年首相に就任し金解禁、ロンドン海軍軍縮条約に調印。右翼青年に狙撃されて重傷、6年4月総辞職

●犬養は、中国に太いパイプを持つ政治家だった
▽明治30年8月 孫文が 日本に亡命した時
外務省は「日本が革命派を助けているように
とられては困る」と 日本滞在に 反対だった
▽犬養は 大隈外相に 掛け合い
「将来の中国との関係からも、孫文を
庇護してやる必要がある」 滞在を認めさせた

「花々と星々と」(犬養道子)から

お祖父ちゃま(犬養)は、お祖母ちゃま(夫人)のお好みの「あっさりした」煮つけを食べさせられていた。孫文がお祖父ちゃまにかくまわれていたころも、いくらそのころは大貧乏のさなかとは言え、菜種油で米を炒めて食べさせることすらしなかった。「油は臭うござんすよ」…「しょっちゅうやって来てはお風呂に入って行った書生は親子丼が好きで、よくおかわりをしたもんでござんす。支那の人は親子丼が好きと見えるねえ」しかし、「支那人が親子丼を好き」というわけではなく、親子丼が犬養家の食物の中で「一番油こい」ものだったからに、ちがいない。「ほんとうにあの書生は親子丼をいつもお代りしたっけが」あの書生の名は蒋介石と言った…

▽汪兆銘など来日 日本が「中国革命のメッカ」に
▽孫文が 臨時大総統に就任(明治45年1月)すると
犬養は 古島と共に招かれて 就任式に出席
▽天皇に「身命を賭して」と 誓ったのも
このパイプを生かして 日中関係の改善を

●組閣参謀の古島に、「虫の食わない材木で作ろうぜ」
▽金の輸出再禁止に 蔵相は 高橋是清
▽久原房之助(幹事長)は「民政党との
挙国一致内閣」を勧めた (政友会171議席 民政党249議席)
▽犬養は「政友会単独で行く」と 断った
自分の満州政策には 連立では 実行できない
▽組閣を決意した時から 議会を解散
国民に信を問い 時局打開を 考えていた
(総選挙=昭和7年2月20日 政友会303議席と圧勝)
▽外相は 娘婿の芳沢謙吉(フランス大使・国際連盟代表)

孫文(そんぶん)
1866～1925 中国の「革命の父」。日本へしばしば亡命し、明治38年東京で「中国革命同盟会」を結成し三民主義を提唱。辛亥革命に帰国し、45年1月臨時大総統に就任。袁世凱に追われたが大正8年中国国民党を組織、12年第1次国共合作を実現させ、国民革命への道を開く

蒋介石(しょう・かいせき)
1887～1975 明治40年日本に留学、振武学校で軍事を学ぶ。辛亥革命で帰国、大正15年国民革命軍総司令として「北伐」を開始、昭和3年北京に入城して国民政府主席に就任。支那事変が始まると、国共合作を受け入れ対日戦を指導。戦後、国共内戦を起こし、23年中華民国総統。内戦に敗れて24年台湾に逃れる

汪兆銘(おう・ちょうめい)
1883～1944 字は精衛。日本に留学し法政大卒。孫文の下で革命運動に従事。蒋介石と合作政権を作り、行政院長。支那事変中に反共親日の和平運動を起こし昭和13年重慶を脱出。15年、南京に設立された国民政府主席。名古屋で病死

久原 房之助(くはら・ふさのすけ)
明治2(1869)～昭和40(1965) 山口県生まれ。藤田組を再建し日立鉱山、久原商事など新興財閥を形成。昭和2年事業を鮎川義介(義兄)に委ね政界入り。逓信相、政友会幹事長。14年政友会(久原派)総裁

なぜ、内閣中枢に森、荒木を

森は、言わば犬養内閣お膳立ての功労者。犬養も無視できない。森は自分が外相になり満州国建国に持って行く腹だったが、犬養は「君は内閣書記官長だ」代わりに陸相は森の強い希望で荒木。「二人を中枢に据えたこと

●森は、組閣半月後には犬養内閣を見捨て動き出した
▽閣議で 森が 強硬論をぶつと
犬養は 怒鳴り付けた
「支那のことなら、俺が知っている！」
▽森は 12月29日 伊沢多喜男(貴族院議員)を訪ね
民政党との連立工作を 働きかけた
▽犬養の不幸 五・一五事件の火種は
森との関係が 決定的に 悪くなったことに

●満州事変平和解決に、どんな手を考えていたのか
▽日本が 満州国建国を 強行すれば
「九ヵ国条約」「不戦条約」違反で
国際世論の袋叩きにあい 国際社会からも孤立
▽国際条約を守り その上で
日本の抱えている 人口・食糧問題解決には
中国と平和共存 日本の「経済立国」の基礎に

犬養の満州構想

満州の政治的主権、宗主権は南京の国民政府に委ねて、中国の顔を立てる。満州には経済目的を中心にした、日中合作の行政機関・自治政権を作る。中国は主権という名を取り、日本は満州の権益といった実を取ろう、というもの。

●首相密使として、萱野長知を中国へ
▽「立言即行は木堂なり」(古島一雄)
▽12月15日(組閣2日後) 萱野を呼んで
「ひとつ、支那へ行ってくれ」
▽南京政府要人に 犬養構想を伝え
合意を 取り付けた上で
首相特使を派遣し 日中正式交渉に移す
▽萱野は変名で 12月23日 上海経由 南京に入った
▽蔣介石(主席)は 正月休みで 帰郷していて
交渉相手に 選んだのが
孫科(孫文の長男 行政院長) 居正(東北政務委員長 満州問題の責任者)
▽「孫文先生の同志来る」と 歓迎されたが
孫科も居正も 首を横に 振るばかり
▽苦渋の色を浮かべていた 二人も
萱野の熱意に 打たれ
蔣介石に取り次ぐことを 承知した

自体、間違いだ」— この批判に道子は「虎穴に入らずんば虎児を得ずで、最も危険な二人を懐中に抱えることで、彼らを牽制しようとしたのだ」
犬養にも自信はあったのだろう。森の父は自由民権運動時代からの同志で、犬養も森を「坊主、小僧」と言って可愛がっていた。犬養が、孫文など革命派を助けた時も、三井物産上海支店勤務の森が連絡役を務めた。

伊沢　多喜男(いざわ・たきお)
明治2(1869)～昭和24(1949) 長野県生まれ。県知事を歴て大正13年台湾総督。東京市長、貴族院議員、枢密顧問官など歴任。民政党系の政界黒幕と言われた

中国に関する九ヵ国条約

(大正11年2月6日調印) 中国の主権を尊重、領土を保全すると共に、門戸開放、機会均等を図る — ワシントン会議に参加した9ヵ国(日本、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、中国、ベルギー、オランダ、ポルトガル)が調印。

不戦条約

(昭和3年8月27日調印) アメリカの提唱で、日本など有力15ヵ国がパリに集まり調印した。「侵略のための戦争をしない」と誓ったもので、翌年発効すると満州事変をはじめ侵略戦争に対する国際的糾弾の重みが変わった。

萱野　長知(かやの・ながとも)
明治6(1873)～昭和22(1947) 高知県生まれ。大陸浪人。明治24年上海に渡り東京日日新聞通信員。32年香港で、孫文と親しく交わるようになり、以後、終始孫文と行動を共にして中国革命を支援した。昭和12年、支那事変の和平工作を図るが、失敗に終わる。戦後、貴族院議員

●蒋介石も汪兆銘(副主席)も、暗黙のうちに了承という形になり、居正に全て一任となった

▽溥儀など 満州側要人の説得に
　居正が「私が行く」「売国奴と罵られるだろう。だが、両国百年のために敢えてそれを厭わない」
　　そして「その後はこれだ」と
　　自分の首を 刎ねる真似をして 見せた

▽萱野は 小躍りする思いで
　犬養首相宛てに「話し合いつく」

▽暗号電報に組み替え「病状、完全に快癒の見込み。入寄越されたし 吉住(上海の日本租界の友人の医師)」

▽打電したが 返事は 来なかった

●萱野の電報は、全て森恪に握り潰されてしまった

森は、1通の不可解な電報を見付けた

昭和7年1月11日。森は内閣書記官長室に来た電報に、引っ掛かるものを感じた。自分の知人に吉住という人物はいないし、病人もいない。電報を見直すと、宛先が犬養首相、しかも発信地は上海。官邸の受付係が間違えて、書記官長宛ての郵便物に紛れ込ませてしまったのだ。

すぐ陸軍省に連絡して、上海の憲兵に調べさせると、吉住という医師の所に、最近頻繁に出入りしている日本人がいる。それは、国民党の居正と往来のある萱野だ、と分かった。

▽森は即刻「以後、上海発信の総理宛ての電報は全て書記官長室に回すように」と 指示した

▽森は 犬養健に「判読不明の電報が犬養の家に行き過ぎると、陸軍が言っているぞ」と ニヤリ

▽萱野は 1月23日 失意のうちに帰国した

●犬養構想は、かなり実現可能なものだった

▽国際連盟リットン調査団が 昭和7年10月2日発表した報告書は 満州問題解決策について
　　驚くほど 犬養構想に 似た提案をしている

▽萱野工作を知った 陸軍は「犬養はけしからん。満州事変を潰そうとしている」と 息巻いた

▽森も「爺さん、あんなことをやっていると、兵隊に殺されるぞ。もう、爺さんのお守りは御免だ」

萱野は真心をこめて説いた

孫科も居正も「若槻内閣は不拡大を唱えながら、事毎に陸軍に押しまくられた。溥儀を擁して、満州独立の準備を進めているようだ。たとえ、中国側が犬養構想を承知したところで、犬養が陸軍を押さえられるか」

萱野は「日本は、満州では日清、日露の二度の戦いでおびただしい血を流している。満州の権益は、血によって得たという国民感情も強い。中国は不満だろうが、お父さんの古い同志である犬養が首相になったこの機会に、歩み寄って解決することが、日中両国百年のために賢明ではなかろうか。犬養は、これが最後のご奉公という積もりで命を懸けている」

溥儀(ふぎ)

1906～1967 清朝第12代、最後の皇帝宣統帝。辛亥革命により退位。昭和7年、陸軍に擁せられ満州国執政、9年皇帝となる。敗戦でソ連に逮捕され、東京裁判に証人として出廷した。25年中国・撫順戦犯管理所に移され、34年特赦。39年政治協商全国委員。著に「わが半生」

道子の子供の頃の記憶に残る森

顔は笑っていても、目だけは笑わない、怖い人だった。

国際連盟リットン調査団報告書

満鉄爆破をきっかけにした「日本軍の軍事行動は、正当なる自衛手段と認むることを得ず」と断定し、満州国についても、「純粋かつ自発的なる独立運動により出現したものと思考することを得ず」と否定した。

しかし、単なる原状復帰は必ずしも事態解決とはなり得ないから満州国に代わる具体策として、東三省(軍、吉

●関東軍は、お構いなしに軍事行動を続けた
▽リットン調査団の派遣が 決まっていて
その前に 既成事実を 作ってしまおうとした
▽荒木陸相も 就任早々 その手を打った
金谷範三参謀総長を更迭し 閑院宮を後任に
▽「実務は次長が執りますから」と 参謀次長に
盟友・真崎甚三郎中将を据え 実権を握らせた

「皇道派」全盛時代の始まり

皇道派と呼ぶようになったのは、荒木が「日本の陸軍は、天皇股肱の軍隊なんだ。皇室をお守りするのは、我らを措いてない」と盛んに皇軍精神を唱えたから。陸軍を「皇軍」と言うようになったのも荒木が陸相になってからで、それまでは「国軍」と言っていた。終戦直前、連隊旗手をしていた村上兵衛(評論家)は、査察に来た将軍が「わが皇軍は…」と訓示すると、傍にいた連隊長が「バカが、わが国軍にそんな言葉はない」と言ったのを、聞いている。

荒木の皇道派人事が露骨で激しかったため、対抗する「統制派」が生まれ、二・二六事件に。

●関東軍は1月3日、錦州(張学良政権の本拠)を占領した
▽敏感に反応した アメリカ
スティムソン国務長官は 1月7日 声明を発表

スティムソン・ドクトリン

一、中国の主権、独立または領土的・行政的保全および門戸開放に関する政策に違反して、アメリカ国民の中国における条約上の権利を侵害するような一切の事実上の状態の合法性を容認しない

一、日中両国政府またはその代理者の締結する一切の条約・協定で、前記権利を侵害するものは、これを承認する意志がない

一、不戦条約に違反する手段よって成立させられる一切の状態・条約・協定を承認しない

これ以後、アメリカのアジア政策は、「軍事力による中国の原状変更を認めない」この原則で運用されることになり、太平洋戦争へ。

林、黒龍江省)に、中国の主権の下に地方自治政府を設けて、日本を中心とする列強の管理下に置く。「大部分は日本人」の外国人顧問任命を提案し、日本憲兵隊による治安・秩序の維持など、日本に宥和的な内容のものだった。

金谷　範三(かなや・はんぞう)
明治6(1873)～昭和8(1933)大分県生まれ。陸軍大将。参謀次長、昭和2年朝鮮軍司令官。5年参謀総長。6年軍事参議官

閑院宮戴仁親王(かんいんのみや・ことひとしんのう)
慶応1(1865)～昭和20(1945) 伏見宮邦家親王の第16王子。陸軍大将・元帥。第1師団長、近衛師団長を経て昭和6年12月参謀総長に就任、15年まで在任した

真崎　甚三郎(まざき・じんざぶろう)
明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍司令官を経て昭和6年参謀次長。皇道派の指導的存在となり9年教育総監。10年更迭され、統制・皇道派対立激化の原因となる。二・二六事件で軍法会議にかけられたが無罪に

村上　兵衛(むらかみ・ひょうえ)
大正12(1923)～平成15(2003)島根県生まれ。評論家。陸士を卒業、近衛歩兵第6連隊旗手。昭和25年東大独文科を卒業。著に「国家なき日本」「守城の人」

張学良(ちょう・がくりょう)
1901～2001 張作霖の長男。父の爆死後満州の実権を掌握。昭和3年12月国民政府に忠誠を誓い、満州の保安総司令に。満州事変で追われ外遊。11年末、内戦停止と徹底抗日を要求して蒋介石を監禁(西安事件)、抗日民族統一戦線結成を促す。戦後、台湾で軟禁。平成2年に名誉回復

▽これに 挑戦するかのように 1月8日
関東軍に勅語「朕深ク其忠烈ヲ嘉ス」
▽関東軍の謀略は 黙認され 不問に付されることに
▽イギリスは 1月11日
「スティムソン・ドクトリン」に追随しない方針

●上海事変が勃発、イギリスの対日感情も一遍に悪化

発端は日蓮宗僧侶殺害事件

1月18日午後4時頃、上海市内で団扇太鼓を叩き、お題目を唱えながら寒修業していた5人が突然「日本人だ、殺してしまえ」の怒号と共に、数十人の群衆に襲われ、1人が死亡、4人が重軽傷を負った。いきり立った日本人居留民が「報復だ」と言って、20日午前3時頃、排日ボイコット運動拠点・三友実業タオル工場を襲撃、警官との乱闘で双方に死者が出たため、上海は一挙に緊迫した情勢になった。

居留民が決起大会を開き、日本政府に出兵要請を決議、国内も「暴支膺懲」で沸き立った。

●結局は、上海へ出兵することになった
▽1月28日夜 海軍陸戦隊と 中国第19路軍が
些細な発砲事件から衝突 市街戦に突入した
▽陸戦隊は1800人 19路軍は7万
海軍は第3艦隊を編成したが 兵力は3千余り
▽大角岑生海相が 荒木に 「陸軍出兵」を頼み込み
閣議は 2月2日 第9師団(鈴)派遣を 決定した

作られた軍国美談「肉弾三勇士」

19路軍は中国軍の最精鋭部隊。苦戦が続き、2月22日早朝、廟巷鎮(びょうこうちん)の攻撃で、3人の一等兵(22歳)が爆死した。爆薬を詰めた竹筒を抱え、高さ3㍍の鉄条網の間に押し込んで爆破しようとしたが、爆薬操作を誤ったとか、導火線の火縄を1㍍にしておけばよかったのに、半分の50㌢にしたため予定より早く爆発したとか、事故死だったと言われる。

ところが陸軍省は、国民の戦意高揚を図るため、友軍の突撃路を切り開くための「覚悟の爆死」と発表。新聞も「世界無比の壮烈な戦死」と

スティムソン(Henry Lewis Stimson)
1857～1950 昭和5年米国フーバー政権(共和党)国務長官。日米開戦時の陸軍長官

関東軍に対する勅語

曩ニ満州ニ於テ事変ノ勃発スルヤ自衛ノ為必要上関東軍ノ将兵ハ果断神速寡克ク衆ヲ制シ速ニ之ヲ芟討セリ 爾来 艱苦ヲ凌キ祁寒ニ堪ヘ各地ニ蜂起セル匪賊ヲ掃蕩シ克ク警備ノ任ヲ完ウシ或ハ嫩江斎々哈爾地方ニ或ハ遼西錦州地方ニ氷雪ヲ衝キ勇戦力闘以テ其禍根ヲ抜キテ皇軍ノ威武ヲ中外ニ宣揚セリ 朕 深ク其忠烈ヲ嘉ス 汝将兵 益々堅忍自重以テ東洋平和ノ基礎ヲ確立シ朕カ信倚ニ対ヘンコトヲ期セヨ

荒木陸相は「陸軍出兵」を提案

首相官邸で遊んでいて、偶然閣議室のドアを開けてしまった道子は、こんな光景を目撃している。

高橋蔵相が、「一体、上海に何人の日本人がいるというのかね。みんな、引き揚げてくればいいではないか」荒木が激しく言い募ると、「君はまだ若い。波が一つ来ただけで、大変だ大変だと言う。支那の身になってみろ。満州をかっさらわれて…。まず、満州を返すことが先決だよ。支那問題は、ここに居られる総理の縄張りだ」

余計な口出しはするなと、止めを刺された荒木が陸軍省に戻り忿懣をぶちまけたため、青年将校は「高橋許せず、高橋消すべし」と、いきり立った。これが、二・二六事件での高橋暗殺の原因になったとも言われる。

大角 岑生(おおすみ・みねお)
明治9(1876)～昭和16(1941) 愛知県生まれ。海軍大将。昭和6年海相となり8年

大々的に報道、陸軍省には弔慰金が殺到した。日本国内は「三勇士ブーム」— 3月上旬、映画5社が一斉に上映したのをはじめ、歌舞伎から新派、絵画や彫刻にも取り上げられた。

●上海派遣軍を編成、さらに2個師団を送った3月3日、やっと19路軍を撃退できた

▽白川義則軍司令官は 午後2時 停戦命令
　師団長 参謀からは「戦闘継続」の声が出たが
　　白川は 上陸2日で 戦闘行為を中止させた

▽真崎参謀次長は この日
　国際連盟総会が開かれるのを 承知の上で
　「少なくとも今3日中は、既定の作戦範囲内に於て、あくまで敵を急追し、徹底的打撃を与えることを期待す」白川は 天皇の指示を守った

▽連盟総会では 見事な停戦に 称賛の声

▽5月5日には 停戦協定が結ばれ
　上海事変を 局地紛争の形で 終結させた

天皇は白川未亡人に歌を贈られた

白川は4月29日、天長節祝賀式で、独立運動の朝鮮人の投げた爆弾によって重傷を負い、亡くなった。天皇は未亡人に「国際連盟との衝突を避けしめたる功績を思ふ」と題して、

「をとめらの ひなまつる日に いくさをば
　とゞめしいさを 思ひてにけり」

このことは、侍従武官が堅く口止めしたため戦争中は知られていなかったが、昭和24年、当時侍従長の「鈴木貫太郎自伝」が刊行された際に、その中で初めて明らかにされた。

●上海事変もまた、陸軍の謀略だった

▽田中隆吉少佐（上海公使館付武官補佐官）は 昭和6年10月初め
　板垣征四郎大佐（関東軍高級参謀）の電報で 奉天へ

▽板垣は「政府が国際連盟を恐れて弱気なので、関東軍の計画が事毎に邪魔される。来春には満州独立まで持って行く積もりだが、この際上海で事件を起こして、列国の注意をそらさせてほしい。そのどさくさに紛れて独立まで漕ぎ着ける」

再任。条約派追放人事を行なう。軍事参議官で中国出張中、飛行機事故で殉職

白川　義則（しらかわ・よしのり）

明治1（1868）～昭和7（1932）愛媛県生まれ。陸軍大将。次官、関東軍司令官歴任。昭和2年田中内閣陸相。上海事変で派遣軍司令官として出征、天長節記念式場で爆弾を投げられて重傷を負い死亡

昭和天皇の指示だった

白川の軍司令官親補式の時、天皇は「白川、ひとつ頼みがある。上海から19路軍を撃退したら、決して長追いしてはならない。3月3日の国際連盟総会までに、何とか停戦してほしい。私はこれまでいくたびか裏切られたが、お前ならば、きっと守ってくれるであろうと思っている」

異例の指示だった。天皇の軍隊に対する命令は「奉勅命令」実際は、参謀総長、軍令部長の作戦計画に基づき、天皇が直接指示されることはない。

鈴木　貫太郎（すずき・かんたろう）

慶応3（1867）～昭和23（1948）関宿藩代官の子として大阪生まれ。海軍大将。連合艦隊長官、軍令部長を歴任し昭和4年侍従長。二・二六事件で襲撃され瀕死の重傷を負う。枢密院議長を経て20年4月首相に就任、聖断で戦争を終結させる

田中　隆吉（たなか・りゅうきち）

明治26（1893）～昭和47（1972）島根県生まれ。陸軍少将。関東軍参謀を経て陸軍省兵務局長の時、東条陸相と対立、昭和17年予備役。戦後、東京裁判で検察側証人として出廷し張作霖爆殺事件が関東軍の謀略だったことなど、先輩、同僚を告発する暴露的証言を行なった

▽川島芳子は 日本人僧侶襲撃に
　殺し屋を雇い 抗日組織に 金をばらまいた
▽田中の方は 居留民に 報復をけしかけ
　19路軍衝突のきっかけとなった 発砲騒ぎも
　　田中の謀略だったと 言われる

●板垣の計略は当たり、昭和7年3月1日、満州国独立
▽張景恵(親日派中国人)などが 行政委員会を組織
　「建国宣言」して 自分たちの国を作った形
　　全ては 関東軍のお膳立てだった
▽9日には 溥儀が執政に就任し 建国式
▽もう「二重国家」だった 陸軍は
　犬養には 一切 内緒で運び 事後承諾させた
▽リットン調査団は 2月29日 来日した
　犬養も「満州問題については、
　　中国と円満解決の道を講ずる」と言うしか…
▽荒木陸相は「満州国即座承認」を主張したが
　犬養は 何とか 承認を引き延ばし
　　その間に 打開策を 図ろうとした

日本の満州国承認

斎藤実内閣の昭和7年9月15日で、国際連盟で否認されると、8年3月27日に連盟を脱退する。

●犬養はなお、軍部に敢然と立ち向かおうとしていた
▽陸軍長老・上原勇作元帥を 動かし
　軍統制を回復しようと 2度 手紙を出している

犬養の上原元帥宛書簡(2月15日)

「陸軍近来の情勢に関し、憂慮に堪へざるは、上官の意、下僚に徹底せず、一例を挙ぐれば満州に於ける行動の如き、佐官級の連合勢力が、上官をして、自然に黙従せしめたるが如き有様にて、世間も亦斯く視て、窃かに憂慮を抱き居候。…満州事変の終局も近々なれど、独占国家の形成(満州国)に進めば、必ずや九ヵ国条約との正面衝突を喚起すべく、故に形式は政権の分立たるに止め、…成べく早く、この事変を終熄し、この機会をもって支那との関係を改善致したき理想に候」

板垣　征四郎(いたがき・せいしろう)
明治18(1885)～昭和23(1948)岩手県生まれ。陸軍大将。昭和4年、関東軍高級参謀となり、満州事変を起こす。13年近衛内閣陸相。朝鮮軍司令官、第7方面軍司令官を歴任し、A級戦犯で刑死

川島　芳子(かわしま・よしこ)
明治40(1907)～昭和23(1948)北京生まれ。清朝皇族粛親王の14女。大正2年、大陸浪人川島浪速の養女として来日し松本高女で学ぶ。清朝再興を画策、日本軍に協力して「男装の麗人」「東洋のマタ・ハリ」と呼ばれた。昭和20年国民政府軍に逮捕され、「漢奸」として銃殺された

マタ・ハリ(Mata Hari)

オランダのダンサー。第1次大戦前夜、パリのムーラン・ルージュで人気を博したが、ドイツのスパイとして処刑された。マタ・ハリはマレー語で「太陽」を意味し、女スパイの代名詞になった。

リットン(Victor Alexander Lytton)
1876～1947 英国の政治家。昭和7年、国際連盟調査団長として満州事変に関する報告書を作成。日本の在満権益は認めたものの、満州国建国は否認した

斎藤　実(さいとう・まこと)
安政5(1858)～昭和11(1936) 岩手県生まれ。海軍大将。明治39年海相。2度の朝鮮総督を経て昭和7年首相。昭和10年内大臣となり、二・二六事件で殺害される

上原　勇作(うえはら・ゆうさく)
安政3(1856)～昭和8(1933)宮崎県生まれ。陸軍大将・元帥。明治45年、西園寺内閣陸相。2個師団増設を要求して辞職、大正政変の因を作る。教育総監、参謀総長歴任。反長州の長老として陸軍重鎮

▽上原が 動かないと見るや
閑院宮(参謀総長) 天皇を 動かすことも

犬養危篤が続いているとき

駆け付けた森恪が、「総理も間違っているよ」芳沢が訳を尋ねると、「総理は陸軍の若い連中30人くらい、首を切ってしまえば、陸軍の統制は回復出来る。参謀総長の了解を得て、陛下に申し上げる。そういうことを考えていたのが、いけないんだ」

芳沢は「犬養が自分に熱っぽくしていた話を森にもしていたのか」一瞬ヒヤリとしたものを感じ「それで犬養が狙われたのではないか」

●日本の社会は、集団ヒステリーのような現象
▽昭和大恐慌で 街には 42万人の失業者
農村は米価暴落 欠食児童 娘の身売りが激増
▽閉塞状況の中で 満州事変
国民には 青天の霹靂のような はけ口に
軍人の血を沸かせ 愛国心を掻き立てた
▽政党の汚職が続き 銀行 商社は ドル買で大儲け
▽青年将校たちは 熱狂的に
「昭和維新の歌」(原題・青年日本の歌)を 歌った

「青年日本の歌」

「汨羅の淵に波騒ぎ… 権門上に傲れども 国を憂うる誠なし 財閥富を誇れども 社稷を思う心なし」三上卓海軍中尉が1夜で作詞・作曲したと言われる。汨羅(べきら)は紀元前277年、楚の国運回復に尽くした憂国の詩人屈原(くつげん)が讒言により失脚し、投身した所。

▽現状打破を目指す動きが 渦巻いていった
▽相次いだ テロ事件 クーデター計画
・浜口首相狙撃事件(5年11月14日)
・橋本欣五郎中佐らのクーデター計画(6年3月、10月)
・桜田門事件(7年1月8日 朝鮮人・李奉昌が天皇の車に手榴弾)
・血盟団小沼正が井上準之助前蔵相射殺(7年2月9日)
・血盟団菅沼五郎が団琢磨射殺(7年3月5日)

●血盟団事件は第1弾、五・一五は連動した第2弾

荒木が統制を乱していた

酒の席とはいえ、満座の中で若い中尉が「おい荒木、一杯飲め」と言うと、たしなめるどころか、「若い者は元気がいいのう」と喜んでいたという。

第6師団長(熊本)の荒木が教育総監部本部長就任のため上京した時、「我らのホープが中央の要職につく」と、沿線各駅には青年将校が集まり、「荒木閣下万歳」を叫ぶ異様な光景が…。

武器を持つ軍隊に秩序・規律がなくなれば、凶器を持った集団になる。五・一五、二・二六は、荒木のような見識のない将軍の姿勢が生み出した。

三上 卓(みかみ・たく)
明治38(1905)～昭和46(1971)佐賀県生まれ。海軍中尉。昭和5年、統帥権干犯問題が起きると国家革新運動に参加、五・一五事件で犬養首相を射殺、禁固15年。13年出獄、皇道翼賛青年同盟、日本主義青年全国会議を結成し新体制運動推進

橋本 欣五郎(はしもと・きんごろう)
明治23(1890)～昭和32(1957)岡山県生まれ。陸軍大佐。トルコ駐在武官を経て参謀本部ロシア班長。満蒙問題解決、国家改造を目指し「桜会」を結成、三月、十月事件首謀者。昭和17年衆院議員。A級戦犯で終身禁固刑を受け、30年仮出所

井上 準之助(いのうえ・じゅんのすけ)
明治2(1869)～昭和7(1932)大分県生まれ。日銀総裁、蔵相歴任。昭和4年浜口内閣蔵相となり金解禁を断行。第2次若槻内閣にも留任。血盟団に狙撃され死亡

団 琢磨(だん・たくま)
安政5(1858)～昭和7(1932)福岡県生まれ。明治4年岩倉使節団に随行し米国留学。東大助教授を経て大正3年三井合名

▽盟主井上日召の自首で やっと 逮捕したが
拳銃の入手先を追及し 海軍将校からと
突き止めていたら 五・一五は 防げたかも

テロ集団の根っこは同じ

五・一五も二・二六も血盟団も、人間的なつながりで言えば、みんなどこかで繋がっていた。青年将校や右翼に大きな思想的影響を与えたのが、大川周明と北一輝だったからだ。中でも北の「日本改造法案大綱」は青年将校のバイブルのようなもの。天皇を奉じて、国家を改革する。その手段を、戒厳令下の軍事クーデターに求め、「それが出来るのは、純粋な君たち青年将校しかいない」 ― 熱っぽく訴えたから、理想主義に燃えた軍人ほど「よし、自分たちの手で」となった。

▽海軍革新派リーダーは 藤井斉大尉

日召の「一人一殺」

日召がキリスト教、曹洞宗を経て日蓮宗に辿り着いて得た信念 ― 国家改造は他人に期待すべきでなく、たとえ1粒の種でも自分で育てた者でやろうと、「捨て石主義」のテロを決意。

「一人一殺」を考えるようになったのは、橋本らが「十月事件」で検挙されてから。連日連夜、料亭でどんちゃん騒ぎ。「成功したらこの地位につける」とポストの約束。権力欲の姿に絶望し、血盟団と海軍だけでやることにした。

元老西園寺ら数十人をリストに挙げ、誰が誰をやるかは、お互いに一切知らせない。担当が決まれば、徹底的に周辺調査し必殺を期した。

▽藤井が 上海事変で戦死し 計画変更
まず 血盟団でのろし 海軍側が第2次襲撃
愛郷塾の橘孝三郎も 参加することに
▽陸軍にも 働きかけたが
安藤輝三中尉は自重論 参加は士官候補生11人

●5月13日、「15日午後5時半一斉蜂起」と決まった
▽第1組9人が首相官邸 残り10人は 3組に分かれ
内大臣官邸 政友会本部 警視庁などを襲撃

理事長。日本工業倶楽部、日本経済連盟を指導。血盟団により射殺される

井上　日召（いのうえ・にっしょう）
明治19(1886)～昭和42(1967)群馬県生まれ。明治42年満州に渡り、大正10年まで陸軍の諜報活動に従事。昭和4年茨城県大洗の立正護国堂に入り国家革新のため青年を指導養成。4年血盟団を組織し、井上準之助、団琢磨暗殺事件を起こす。9年無期懲役判決、15年大赦で出獄

大川　周明（おおかわ・しゅうめい）
明治19(1886)～昭和32(1957)山形県生まれ。大正7年満鉄に入社し東亜経済調査局長。北一輝らと猶存社を結成、日本精神を説き、陸軍の三月・十月事件に参画。五・一五事件に連座し禁固5年。A級戦犯で逮捕されたが、精神障害で免訴

北　一輝（きた・いっき）
明治16(1883)～昭和12(1937)新潟県佐渡生まれ。本名輝次郎。中国革命同盟会に参加。大正8年「日本改造法案大綱」を執筆、青年将校に大きな影響を与える。二・二六事件で指導者と見做され刑死

藤井　斉（ふじい・ひとし）
明治37(1904)～昭和7(1932) 佐賀県生まれ。海軍大尉。ワシントン会議で海軍軍縮が決まった大正11年海兵に入学。在学中から国家革新運動を行い、昭和3年海軍内に王師会を結成。4年霞ケ浦航空隊勤務となり、井上日召を知る。上海事変に空母加賀パイロットとして従軍し、偵察飛行中に戦死

橘　孝三郎（たちばな・こうざぶろう）
明治26(1893)～昭和49(1974)水戸市生まれ。明治45年、トルストイの農民思想に感銘を受け、1高を中退して郷里で農

▽愛郷塾の別働隊7人が 変電所6ヵ所を襲撃
帝都を真っ暗闇にし 戒厳令を布く計画だった

●日曜日の首相官邸は、閑散としていた
▽健は 前日来日のチャップリンを案内 相撲見物
犬養夫人は 芳沢外相と 親戚の結婚式に
道子は 芳沢の官邸で 従姉妹とラケット遊び
▽官邸にいたのは 犬養 仲子(麒人) 5歳の道子の弟

なかなかの女丈夫だった仲子

長与専斎の孫で、又郎、善郎は伯父。犬養の家には右翼・左翼の主義者と称する連中が、しょっちゅう金をせびりに来た。健が家にいても、女中が呼びに行くのはいつも仲子。
土足で上がりでもしようものなら「そこに雑巾があるから、お拭き」 仕込み杖を抜いて玄関のガラス戸を割った時には「ガラス代、あんた払うのよ。そうしないと承知しないから」
ポンポン言ってのけ、一歩も引かなかった。

●午後5時半頃、表の方で銃声がして…
▽警護の巡査が「暴漢です。お逃げ下さい」
犬養は 静かな調子で
「いいや、逃げぬ。会おう」
▽表玄関で 巡査を射殺した5人が 駆け込んで来て
三上中尉が いきなり 拳銃を発射したが
弾丸が 装填してなかった
▽犬養は「まあ急くな」と ゆっくり 手を振り
「撃つのはいつでも撃てる。あっちへ行って
話を聞こう、ついて来い」4人を日本間に
▽1人は 仲子が動かぬよう 拳銃を突き付けた
▽犬養が 煙草盆を引き寄せ 1本抜き取って
「話せばわかる」と 一同を見回し
「靴ぐらい脱いだらどうじゃ」叱ったところへ
裏門組の4人が 乱入して来た
▽三上が「我々が何のために来たか、
わかるだろう。言い残すことはないか」
▽犬養が 何か 話そうとした瞬間
山岸宏中尉が「問答無用、撃て！」と叫び
三上らの発射した弾丸で 犬養は 血に染まった

業を始める。郷土を愛し、農業中心の社会主義を作ろうと、昭和6年愛郷塾を設立し塾長。五・一五事件で無期懲役の判決を受けたが、15年恩赦で出獄

安藤 輝三(あんどう・てるぞう)
明治38(1905)～昭和11(1936)石川県生まれ。陸軍大尉。二・二六事件で歩兵第3連隊中隊長として鈴木侍従長邸を襲撃し、重傷を負わせる。軍法会議で死刑

チャップリン(Charles Chaplin)
1889～1977 英国出身の映画俳優。渡米し喜劇映画に出演、監督も。稽味味の中に哀調のある独特の仕草で、弱者・貧者の悲哀や西欧現代社会の不平等への怒りを表現した。「黄金狂時代」「モダン・タイムス」「ライムライト」 全81作品

長与 専斎(ながよ・せんさい)
天保9(1838)～明治35(1902) 肥前生まれ。緒方洪庵の適塾で医学を学び、東京医学校校長、内務省衛生局長など歴任。コレラ予防など衛生行政の基礎を作る

長与 又郎(ながよ・またお)
明治11(1878)～昭和16(1941)東京生まれ。専斎の三男。東大医学部長として心臓、肝臓研究の権威。昭和9年東大総長

長与 善郎(ながよ・よしお)
明治21(1888)～昭和36(1961)東京生まれ。専斎の五男。白樺派の作家。「わが心の遍歴」で昭和36年読売文学賞

拳銃を突き付けられ、仲子は

「1つ、2つ」と、9つまで銃声を数えていた。同時に頭の中では、万一に備え記憶していた優れた外科医や内科医の電話番号を確認、即死でなく、出血多量の場合にすぐやる応急手当ての

●犬養は血潮の中、両手でテーブルに突っ張るようにして、姿勢だけはシャンと座っていた
▽女中に「呼んで来い、いまの若いモン。
話して聞かせることがある」
▽医師団発表(午後6時40分)では
こめかみ 顎から入った弾丸は 3発
「急所は外れていて、生命は取り止める」
▽犬養も「9つのうち3つしか当たらんようじゃ、
兵隊の訓練はダメだ」冗談を言っていたが…
▽容体が急変 午後11時半 危篤となり
午前2時半 亡くなった 77歳だった

●五・一五事件は、「犬養暗殺だけがあった」感じ
▽計画は 事前に 一部関係者に 洩れていた
▽山口一太郎陸軍大尉(二・二六事件で無期禁固)は
「5月初めには、西田税から聞いていた」
山口は「こんなに知れ渡っていては、ろくな
結果になるまい。海軍がやるのは勝手だが、
陸軍が巻き込まれるのは避けたい」
▽小畑敏四郎少将(参謀本部第3部長)に 相談すると
「西田にも言って、絶対に抑えろ」
▽小畑は 荒木陸相側近の 第一人者
当然 荒木に注進し 森の耳にも入っていたろう
▽森 荒木は 不穏な情報を 掴んでいながら
憲兵に調べさせたり 警護の警官増員など
防ぐ手立ては 何も取らずに やるに任せた
▽古島一雄は「政友会本部に犬養の屍を担ぎ込んで
弔い合戦をやれ」耳をかす者は いなかった
▽政党人にとって テロの影に怯え
軍部 右翼を恐れる時代に なっていった

●元老西園寺は、斎藤実海軍大将の「中間内閣」とした
▽平沼騏一郎(枢密院副議長)や
「陸軍にやらせろ」といった 声もあったが
昭和天皇の意向は
「ファッショのような者は絶対にいけない」
▽西園寺は自ら「政党内閣」の幕を 引くことに

●首相暗殺は、3度目だったが…
▽原敬 浜口雄幸は 右翼の単独犯行

順序まで、考えていた。
駆け付けた外科医は後で道子に「あの時の電話は、大したものでした。医者の尋ねたい全てのことを、脈拍、出血量、弾丸の貫通場所まで、的確に話された。あんたのお母さんは、とんでもない女傑かも知れん」

道子が鮮明に覚えているのは…

芳沢外相夫人が、次々と駆け付けて来る閣僚の中に荒木陸相を見付けると、その前に立ちはだかる形で、低いが強い声で「荒木さん、あんたがやったんだ」 とたんに軍服姿の荒木は、崩れ折れるように廊下に両手を突いて、長い間背中を震わせていた。

西田　税(にしだ・みつぎ)
明治34(1901)～昭和12(1937)鳥取県生まれ。大正14年、騎兵少尉の時に病気で陸軍を辞め、北一輝門下となり、青年将校に北思想を説く。五・一五事件で血盟団員に撃たれ重傷。二・二六事件で死刑

小畑　敏四郎(おばた・としろう)
明治18(1885)～昭和22(1947)高知県生まれ。陸軍中将。昭和7年参謀本部第3部長。陸大校長などを歴任、対ソ戦略家として知られた。二・二六事件後に皇道派粛正で予備役。戦後、東久邇内閣国務相

おかしな点は他にもあった

海軍将校は、首相官邸の見取り図を持っていた。内大臣襲撃組は「内大臣がいるか、わからなかったので、手榴弾を投げただけにした」日曜の夕方忙しい首相が確実に官邸にいるという情報を、どこから掴んだのか。
最初は、首相官邸のチャップリン歓迎晩餐会襲撃を計画したが、確実な日程が分からずに断念した。彼らは、

▽陸海軍軍人の 組織的な集団的テロ
どの新聞も「言語道断、未曾有の不祥事」
▽福岡日日(現西日本新聞)編集局長 菊竹淳は
社説で 軍部の暴走を 厳しく 非難した

「敢て国民の覚悟を促す」

陸海軍人が首相官邸に押し入りて、老首相を虐殺せるに至っては実に言語道断の沙汰といわねばならぬ。…ファッショ運動が日本を救うべし、と信じ得べき何等の根拠もない。…吾々の政治的進路は明白である。これ等の過誤欠陥を補正しつつ立憲代議政体の大道を静かに進むまでである。…国民に対する挑戦に向かっては、断々乎として之れを排撃するの堅き決心を懐かんことを要求せねばならぬ。

▽地元の青年将校が 抗議に 押し掛けた
「陛下の軍隊を侮辱し、国家革新のために
決起した軍人を中傷するものだ」
在郷軍人会は 福岡日日不買運動
▽太刀洗航空隊の爆撃機は 社屋上空を旋回
急降下を繰り返し 威嚇した

●軍法会議が始まると「国士、義士」扱いし、賛美する声
▽法廷に寄せられた 減刑嘆願書は35万通に
▽軍法会議判決は「法治国家」の否定だった
陸軍(昭和8年9月19日) 士官候補生11人が禁固4年
海軍(11月9日) 三上ら2人の 禁固15年が最高
▽犬養暗殺に 直接参加していない橘は 無期懲役

荒木陸相談話

純真な青年が、このような行動に出た心情を考えれば、涙なきを得ない。この事件を契機として、被告の心情を無にしない事を切望する。

▽皇太子誕生(8年12月13日) 皇紀2600年
相次ぐ恩赦で 昭和15年までに 全員が釈放

●軍紀、軍律の乱れを放任したところに、最大の禍根
▽個々の政治家で 軍部に 抵抗した人はいたが
軍部の力が 余りに 強くなり過ぎ
政党が骨抜きにされ 力を発揮できなかった

15日なら、犬養が必ず官邸にいると、知っていたことになる。
大川周明が相談役になっていて、海軍将校は、森、荒木と親しい大川から見取り図、情報を入手したのか？

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)
慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。検事総長、大審院長、法相を歴任。右翼結社「国本社」を主宰し枢密院副議長の時、ロンドン軍縮条約に反対。昭和11年枢密院議長。14年首相。A級戦犯で終身禁固刑の判決を受け仮出所中病没

原 敬(はら・たかし)
安政3(1856)～大正10(1921) 岩手県生まれ。外務次官、逓信相、内相歴任。大正2年政友会総裁。7年純政党内閣を組織、「平民宰相」と世論の支持を受けたが、東京駅で暗殺される。著に「原敬日記」

菊竹 淳(きくたけ・すなお)
明治13(1880)～昭和12(1937)福岡県生まれ。号は六鼓。明治36年福岡日日新聞に入社し編集局長、副社長。議会政治擁護、軍部批判の論説2700編を執筆した

鈴木貫太郎の言葉

犬養は満州の独立に反対した。そして策動家の手先になった軍人の犠牲になったが、後始末については誠に遺憾な点が多い。どんな理由があるにしても、あの暴徒を愛国者と認め、しかも一国の宰相を暗殺した者に対して減刑の処分にして、1人も死刑に処せられる者がなかったということは、いかにも国家の綱紀から見て許すべからざる失態だった。政治の大綱が断ち切られたような気がした。